

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

研究題目	グラーフ・ピアノ(1839年頃ウィーン製)の鍵盤アクション部のレプリカ製作と、それを利用した演奏実践研究	報告書作成者	大塚直哉
研究従事者	大塚直哉		
研究目的	<p>東京藝術大学が2010年に購入した、オリジナルのグラーフ・ピアノ(1839年頃製作)は、楽器のボディや鍵盤アクション部分がほぼすべてオリジナルの状態であるといわれている。製作したコンラート・グラーフは、18世紀ウィーンのピアノ製作の伝統に則りながら、音域の拡大と、それに伴う楽器の大型化に取り組んで優れた成果を上げた製作者である。グラーフの楽器はベートーヴェン、メンデルスゾーン、シューマン夫妻なども弾いていたもので、この東京藝術大学所有の楽器も19世紀のピアノ音楽の響きを追求するものにとって、多くのことを教えてくれる可能性を秘めた貴重な楽器である。その一方で、アクション部の中でもとくにハンマーヘッドの皮は消耗品であり、おそらくこのまま使い続けていき消耗してしまったときには、もはやこれと同じクオリティの革を手に入れることができるかどうか定かではない、と修復家をはじめ、複数の識者から警告されている。そこで、まだ革の磨耗がはなはだしくない現時点で、鍵盤アクション(鍵盤及びハンマー)の複製(レプリカ)を製作し、普段の学生の練習にはこちらを用い、また年に数回はオリジナルの鍵盤に戻すことも可能である状態にすることで、このグラーフ・ピアノのオリジナルの響きを次世代にも伝えることができる状況を作ることが、本研究の目的である。</p>		

研究概要報告書【音楽振興部門】

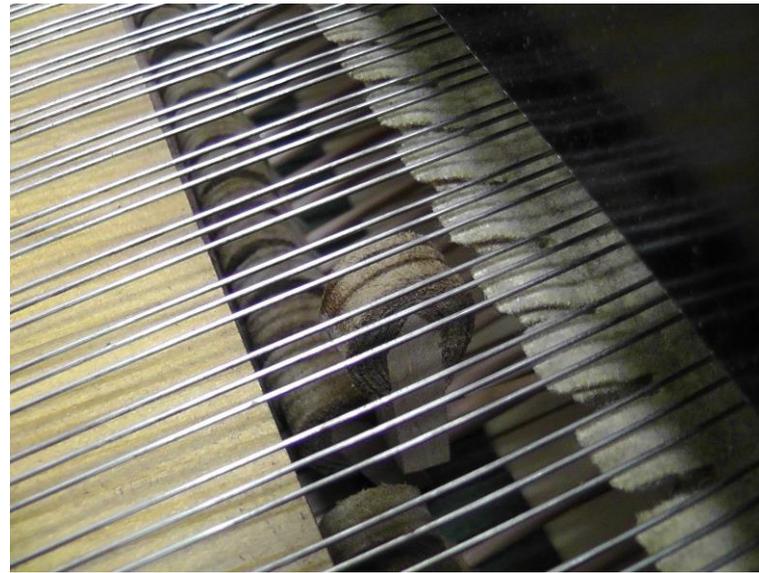
( / )

研究内容	<ol style="list-style-type: none"><li>1) 東京藝術大学所蔵のグラーフ製ピアノ(No.2627、1839 年頃製)の鍵盤アクション、とりわけハンマーヘッドの革に注目し、他のグラーフ製ピアノとも比較し、現況を把握した。</li><li>2) その結果に基づきながら、ハンマーヘッドを含む鍵盤アクション部全体の複製(レプリカ)を製作した。製作は研究協力者である太田垣至氏が行った。</li><li>3) 作成したレプリカをオリジナルの本体に組み入れ、学生に対するレッスン等に使用を始めた。</li><li>4) 革やアクションの状態が落ち着く頃合いを見計らって(もう数か月)、オリジナルの鍵盤アクションと、レプリカによる比較演奏を行い、それをレプリカの調整にフィードバックすることを予定している。</li></ol>
------	---

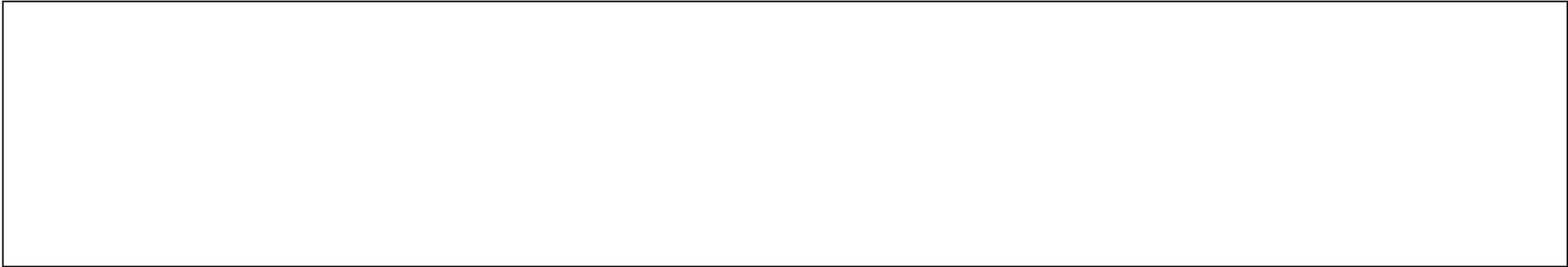
研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

<p>研究のポイント</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1839年 C.グラーフ製作のオリジナルのピアノ(東京藝大所蔵鍵盤)の鍵盤アクションのレプリカを作り、それを普段は使用することで、オリジナルの鍵盤アクションの消耗を最小限度にとどめる環境を作る。</li> <li>・また、その副産物として、レプリカ鍵盤にはいろいろな皮革材によるハンマーヘッドを試すことができるという利点もある(オリジナルでは、度重なるハンマーヘッドの付け替えは部品の損耗が激しくなる可能性あり)。このことは、今後のハンマーヘッド材選択の際の貴重な資料となる。</li> </ul>
<p>研究結果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まだ出来立てで安定していないものの、所与の目的を果たすことができる鍵盤アクションレプリカができた。</li> <li>・鍵盤アクションレプリカ作成のための、観察及び計測等を通し、オリジナルをよりよく知ることとなった。</li> <li>・鍵盤アクションのレプリカを普段は使用することで、オリジナルの鍵盤アクションの消耗を最小限に抑え、次世代もこの楽器のオリジナルな状況を共有できる環境を作ることができた。</li> </ul>
<p>今後の課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・繊細かつ精確な作動を要求される鍵盤アクションが、日本の四季を一通り体験し、どのように安定していくか、弾きこみつつ理想的な調整を探っていく必要がある。</li> <li>・複数の奏者が集まり、試奏印象の交換、オリジナルとレプリカの響きや弾奏感の異同についての感想の交換を行い、レプリカの調整にフィードバックを行っていきたい。</li> <li>・このレプリカが安定したあかつきには、今度は異なる皮革材によるハンマヘッドを比較演奏してみる実験を行えるのではないかと。</li> <li>・レプリカアクションの安定を待ち、オリジナル、レプリカ両方によるレクチャーコンサートを行いたいと考えている。</li> </ul>



上左) 鍵盤レプリカ  
上右) アクション部 (ハンマー等)  
下) 楽器全景



(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)

様式-10